



孫田佳奈（生物学）

植物山歩（さんぽ）@早月尾根から劔岳

2025年7月19日（土）に富山県上市町の早月尾根を歩いてきました。スタート地点の馬場島（標高750m）から劔岳頂上（標高2,999m）に至る標高差約2,300m、片道7kmのルートです。北アルプス三大急登に挙げられるほどに標高差と斜度が大きいこと、そして劔岳頂上に近づくと険しい岩場が連続することから、試練とも称されます。厳しいとわかってはいるものの、富山の街から立山連峰を眺めているうちに慣れてしまったのです。仕方ないですね。

実はこのルートは植物屋にとって魅力的な道のりです。植生分布は主に水平分布と垂直分布で説明されます。南北方向の気候帯（熱帯～温帯～寒帯）に応じて変化するのが水平分布であり、標高（海拔0m～エベレスト山頂8,849m）に応じて変化するのが垂直分布です。標高差の大きいこのルートでは、わずか7km歩くだけで垂直分布の劇的変化を体感しつつ、多様な植物に出会えるという、大変お得な体験ができるのです。

日の出前の3時に、クマ対策の鈴を鳴らして馬場島をスタートしました。歩き始めは冷温帯林（夏緑樹林）です。ブナやミズナラ、オオカメノキ、カエデ類などから成る、日本海側の山地帯特有の森林が広がります。その中にはタテヤマスギの巨木も混じり、登山道に立ち並んでいます。驚くことに、登山道はタテヤマスギの根の上に設けられているので、根を階段にして進みます。そして足元にはマイヅルソウやタケシマラン、ハクサンオミナエシやダイモンジソウなどの草本が生えています。贅沢な気分で歩き続けると、標高2,000m程から大きな岩や池が出てきて、コイワカガミやモミジカラマツなどの亜高山帯性の草本も増えてきた頃、中間地点である早月小屋（標高2,200m）に到着しました。

おにぎりを食べて一息ついたら、山頂を目指して出発しました。シラビソやオオシラビソなどの針葉樹にナナカマド類やダケカンバが混ざる亜高山帯針葉樹林は、標高2,400mほどで森林限界となり、ハイマツ帯へと変わります。登山道はガレ場と岩場続きになったので、ヘルメットを装着しました。この先は高山植物が次々に現れます。雪渓脇にはハクサンイチゲやミヤマキンポウゲ、ツガザクラ、ヨツバシオガマ、ダイモンジソウなど、砂礫斜面にはイワオウギやチシマギキョウなど、立山室堂～稜線部でもよく見られる植物がいます。そして岩場には、ミヤマオダマキやイワベンケイ、クモマグサ、シコタンソウといった、立山周辺では分布や個体数が限られている植物がいます。ナイス岩場！にワクワクしていたところに高山のアイドル・ライチョウも出てきて大興奮。危うく岩場から滑り落ち…はしなかったのが、慎重に歩みを進めます。標高2,810m付近では登山道の一部が崩れていたのが、ハイマツの根の上に足を置いて進みます。土壌を支えている植物のすごさとありがたみを感じました。その後は鎖場の連続で、スリルを味わいながら進んでいけば、劔岳山頂に到着です。時刻は9時半、この日はとてもいい天気で、山頂からは日本アルプスの山々に加え、富士山までくっきり見えていました。

ゆっくり休憩したら、来た道を引き返します。長い長い長い下り道を経て、17時にスタート地点の馬場島へ戻りました。下山後のコーラは全身にしみわたり、別格の味わいでした。その後2日間ほど続いた脚の筋肉痛を乗り越え、今回の山歩を無事に終えました。